子夜春歌

郭震

陌頭楊柳枝　　陌頭　楊柳の枝
已被春風吹　　已に春風に吹かれたり
妾心正斷絶　　妾が心　正に断絶す
君懷那得知　　君が懐い那ぞ知ることを得ん

〔韻字〕枝・吹・知（上平声支韻）。

この詩は、春になっても旅から帰ってこない男性（夫であろう）を恋い慕う女性の気持ちを詠んだもの。

◯詩題　楽府題の一つ。『楽府詩集』巻四十五・清商曲辞・呉声歌曲に属する。東晋の時代、呉の地に子夜という名の娘が歌を作って歌っていた。その曲は哀調を帯びたもので大流行した。その曲を「子夜歌」といい、また、春夏秋冬の四部に分けて歌詞が作られるようになり、それを「子夜四時歌」という。のちに後人によっていくつも替え歌が作られた。『楽府古題要解』巻上に「晋に女子有り、子夜と曰う。作る所の声至りて哀

し。晋の武帝、太元中（三七六～三九六）に、瑯琊王軻の家に鬼有り之を歌う。後人四時行楽の詞に依って、之を子夜四時歌と謂う」とある。『全唐詩』では「子夜四時歌六首 春歌二首其二」に作る。

陌頭　楊柳の枝、已に春風に吹かれたり

道のほとりの柳の枝は、もう春風に吹かれて靡いている。

◯陌頭　道ばた。道のほとり。ちなみに畑のあぜ道を阡陌といい、阡は、南北に通るあぜ道のこと。陌は、東西に通るあぜ道のことをいう。『宋書』劉穆之伝に「時に穆之、京城に叫譟の声有るを聞き、晨に起きて陌頭に出で、属〻信いと会う」とある。京城は、都。叫譟は、騒ぎ立てる声。信は、ここでは使者。また、南朝梁の武帝の楽府「襄陽白銅鞮歌三首」（『玉台新詠』巻十）の第一首に「陌頭の征人去り、閨中の女　機を下る」とある。襄陽は、現在の湖北省襄陽市。鞮は、革履（革靴）。征人は、旅人。閨中の女は、閨（婦人の部屋）にいる妻。機は、機。**◯楊柳**　柳の総称。楊は、カワヤナギ。柳は、シダレヤナギ。古楽府「折楊柳の歌辞」（『楽府詩集』巻二十五）に「馬に上れども鞭を捉らず、反って折る　楊柳の枝」とある。また、南朝梁の簡文帝の楽府「折楊

柳」（『玉台新詠』巻七、『楽府詩集』巻二十二）に「楊柳乱れて糸を成し、攀折す上春の時」とある。攀折は、枝を引き寄せて折ること。上春は、陰暦の正月。孟春に同じ。

◯**春風**　春の風。春の暖かい風。戦国時代、楚の宋玉「登徒子好色の賦」（『文選』巻十九）に「春風を寤り、鮮栄を発す」とある。鮮栄は、美しい花。また、南朝斉の謝朓の楽府「永明楽十首」（『楽府詩集』巻七十五）の第三首に「秋雲　甘露を湛え、春風　芝草を散ず」とある。また「子夜四時歌七十五首　夏歌二十首」（『楽府詩集』巻四十四）の第十三首に「昔別るるとき春風起こり、今還りて夏雲浮かぶ」とある。また、南朝梁の沈約「高きに登って春を望む」詩（『玉台新詠』巻五）に「春風雑樹を揺かし、蕤蕤緑にして且つ丹し」とある。蕤蕤は、草木の花の美しいさま。また、西晋の潘岳「悼亡の詩三首」（『文選』巻二十三、『玉台新詠』巻二）の第一首に「春風は隙に縁りて来たり、晨霤は檐を承けて滴る」とある。悼亡は、妻の死を弔うこと。隙は、戸の隙間。晨霤は、雨だれ。

妾が心　正に断絶す、君が懐い那ぞ知ることを得ん

わたしの心は断ち切れんばかりの苦しさ。あなたの胸のうちは、どうしたら知ること

ができるのでしょう。

◯**妾**　女性の一人称代名詞。わたし。わらわ。「古詩、焦仲卿の妻の為の作」（『玉台新詠』巻一）に「妾は駆使に堪へず、徒らに留まるも施す所無し」とある。駆使は、こき使われること。また、三国魏の文帝（曹丕）「寡婦」詩（『魏文帝集』、『古詩紀』巻二十二）に「妾が心感じて惆悵し、白日忽ちに西に頽る」とある。惆悵は、嘆き悲しむこと。◯**妾心正断絶**　私の心は断ち切れんばかりの苦しさ。南朝梁の呉均の詩「蕭洗馬子顕の古意に和す六首」（『玉台新詠』巻六）の第三首に「春草攬りて結ぶ可し、妾が心正に断絶」とある。◯**君懐**　あなたの胸のうち。あなたの気持ち。「古詩八首」（『玉台新詠』巻一）の第六首に「風に従って君が懐に入る、四坐歓ばざる莫し」とある。四坐は、部屋の四方に坐っている人。その坐にいるすべての人。◯**那得知**　どうしたら知ることができようか。『世説新語』品藻篇に「王（子敬）曰く、外人那ぞ知るを得ん」とある。王子敬は、東晋の書家、王献之（三四四～三八六）。王羲之の七男。外人は、ここでは世間の人。◯**那**　「なんぞ」と読み、「どうして～か（いや～ではない）」と訳す。反語の意を示す。

この詩は江戸時代の詩人によって、いくつか意訳されている。

道のほとりの青柳（あおやぎ）を　あれ春風の吹きわたる
　わしの心の遣（や）る瀬のなさを　思ふあたりに知らせたや（服部南郭（なんかく））

町のほとりの柳さへ　あれ春風が吹くわいな
　わしが心の遣る瀬なさ　思ふとのごに知らせたい（柳沢淇園（きえん））

往（ゆ）き返る　ちまたの柳　枝垂れて　春のあらしに吹かるめり
　心乱れしこのうさを　恋しき人の知るべくもがな（大江玄圃（げんぽ））

南樓（なんろう）の望（ぼう）（南樓望）

盧僎（ろせん）

去國三巴遠　国（くに）を去（さ）って　三巴（さんぱ）遠（とお）く
登樓萬里春　樓（ろう）に登（のぼ）れば　万里春（ばんりはる）なり

傷心江上客　心を傷ましむ　江上の客
不是故郷人　是れ故郷の人ならず

〔韻字〕春・人（上平声真韻）。

この詩は、ある春の日、作者がある町の南楼に登り、周りの景色を眺望しながら望郷の念を詠んだもの。

◯詩題　南楼からの眺め。南楼は、町を囲む城壁の南門の上に建てられた望楼。『全唐詩』では「南の望楼」（南望楼）に作る。**◯望**　眺め。眺望。

国を去って　三巴遠く、楼に登れば　万里春なり

長安の都を去って、はるばると三巴の地までやって来た。南楼に登って眺望すれば、万里の彼方まで春景色である。

◯去国　長安の都を去って。国は、国都長安を指す。また、故郷（故国）とする説もある。劉宋の顔延之「謝監霊運に和す」詩（『文選』巻二十六）に「国を去って故里に還り、幽門に蓬藜を樹う」とある。監は、秘書監。幽門は、静かな門。蓬藜は、蓬や藜。

また『荘子』徐無鬼篇に「子、夫の越の流人を聞かずや。国を去ること数日なれば、其の知る所を見て喜ぶ」とある。こちらの国は故郷（故国）の意。◯**三巴**　後漢の頃、巴郡・巴東・巴西の三つの郡があった地域。現在の四川省東部、湖北省に近いところを指す。『華陽国志』巴志に「（劉）璋、乃ち永寧を改めて巴郡と為し、固陵を以て巴東と為し、（龐）羲を徙して巴西の太守と為す。是れを三巴と為す」とある。劉璋は、後漢末の群雄の一人。巴郡は、現在の重慶市一帯。巴東は、湖北省との省境辺。龐羲は、後漢末の武将。巴西は嘉陵江上流。◯**登楼**　南楼に登れば。南楼に登って眺望すれば。三国魏の王粲「登楼の賦」（『文選』巻十一）に「茲の楼に登りて以て四に望み、聊か暇日以て憂いを銷す」とある。四は、四方。暇日は、暇なとき。◯**万里春**　万里の彼方まで春景色である。隋の盧思道「上巳に禊飲す」詩（『古詩紀』巻一百三十二）に「聊か一樽の酒を持して、共に千里の春を尋ぬ」とある。上巳は、五節句の一つ。陰暦三月三日。桃の節句。禊飲は、禊ぎして飲宴すること。

心を傷ましむ　江上の客、是れ故郷の人ならず

私の心を傷ませるのは、川のほとりを往来する旅人が、一人としてわが故郷の人では

ないということだ。

○**傷心**　私の心を傷ませるのは。胸が傷むのは。前漢の司馬遷「任少卿に報ずるの書」（『文選』巻四十一）に「故に禍は欲利より憯ましきは莫く、悲しみは傷心より痛ましきは莫く、行いは先を辱しむるより醜きは莫く、詬なるは宮刑より大いなるは莫し」とある。先は、祖先。また、前漢の蘇武「詩四首」（『文選』巻二十九）の第二首に「俛仰して内に心を傷ましめ、涙下りて揮う可からず」とある。俛仰は、うつむいたり、仰向いたりすること。揮うとは、拭うこと。○**江上客**　作者が今、目にしている、南楼の下を流れる川のほとりを往来する旅人。また、江上の客を作者自身とする説もある。劉宋の謝霊運「南楼の中にて遅つ所の客を望む」詩（『文選』巻三十）に「楼に登りて誰が為にか思う、江に臨みて来客を遅つ」とある。○**不是故郷人**　江上を往来する旅人は、一人としてわが故郷の人ではない。みな他郷の人ばかりだ。なお、江上の客を作者自身と解釈した場合は「私は結局、この土地を故郷とする人間ではないのだ」と訳すことになる。劉宋の湯恵休の楽府「江南の思い」（『楽府詩集』巻二十六）に「情を垂れて春草に向かえば、是れ故郷の人なるを知る」とある。情を垂れるとは、心を込めること。春草に向かうとは、春の草をじっと見つめること。

汾上にて秋に驚く（汾上驚秋）

蘇頲

北風吹白雲　北風　白雲を吹き
萬里渡河汾　万里　河汾を渡る
心緒逢搖落　心緒　揺落に逢い
秋聲不可聞　秋声　聞く可からず

〔韻字〕雲・汾・聞（上平声文韻）。

この詩は、作者が旅の途中、汾水のほとりに差しかかったとき、いつの間にか辺りを包む秋の気配に気づき、その驚きを詠んだもの。なお、汾水はその昔、漢の武帝が船を浮かべて遊び、「秋風起こりて白雲飛び、草木黄落して雁南に帰る。蘭に秀有り菊に芳り有り、佳人を懐いて忘るる能はず。楼船を汎べて汾河を済り、中流に横わりて素波を揚ぐ。簫鼓鳴りて棹歌を発す。歓楽極りて哀情多し。少壮幾時ぞ老いを奈何せん」とい

う「秋風の辞」を作った川として有名。この詩も「秋風の辞」を踏まえて作ったもの。

○**汾上**　汾水のほとり。汾水は、山西省寧武県の西南に源を発し、黄河に注ぐ川。汾河ともいう。上は、ほとり。『水経注』汾水篇に「汾水は太原汾陽県の北、管涔山を出づ」とある。○**驚秋**　もう秋になったかとハッと驚く。秋の気配の訪れにハッと胸をつかれる。

北風　白雲を吹き、万里　河汾を渡る

北から吹いてくる冷たい風が白い雲を吹き飛ばすなか、万里の旅の道すがら、私は今この汾河を渡っている。

○**北風**　北から吹いてくる冷たい風。『詩経』邶風・北風に「北風其れ涼なり、雪雨ること其れ雰たり」とある。雰は、雪がさかんに降るさま。なお、平野彦次郎『唐詩選研究』（明徳出版社、昭和四十九年）では「四時の風は、春は東風、夏は南風、秋は西風、冬は北風というのが普通である。しかしこの詩では、秋の風を特に北風といっている。語調の関係であろう」と言っている。○**白雲**　白い雲。ここでは、漢の武帝「秋風の辞」の「秋風起りて白雲飛ぶ」とあるのを踏まえる。○**吹**　吹き飛ばす。吹き流す。○

万里　（一万里の意から）きわめて遠いこと。ここでは、都から遠く離れた旅の途中にあること。前漢の李陵「別歌」（『古詩紀』巻十二）に「万里を径りて沙漠を度り、君が将と為りて匈奴に奮う」とある。**○河汾**　もとは黄河と汾水のことであるが、ここでは「秋風の辞」にある「楼船を汎べて　汾河を済る」とあるのを踏まえる。汾河は、汾水の別名。押韻の都合で汾河を逆にしている。また『漢書』揚雄伝に「揚は河汾の間に在り、周衰えて揚氏或いは侯と称し、号して揚侯と曰う」とある。こちらの河汾は、黄河と汾水の意。

心緒　揺落に逢い、秋声　聞く可からず

私の心は、ただでさえ糸のように乱れているのに、あたかも落葉が揺れながら落ちる季節にめぐり逢い、秋の物音など寂しくてじっと聞いていることはできない。

○心緒　心の糸口。心の動き。情緒。緒は、糸のはし。後漢の蔡琰（一説に蔡琰に仮託したもの）の楽府「胡笳十八拍」（『楽府詩集』巻五十九、『楚辞後語』巻三）の第十七拍に「去る時は土を懐いて心緒無く、来たる時は児に別れて思いは漫漫たり」とある。また、隋の孫万寿「遠く江南を戍りて、京邑の親友に寄す」詩（『古詩紀』巻一百三十

五）に「心緒乱れて糸の如く、空しく疇昔の時を懐う」とある。戍るとは、武器を持って辺境を守ること。京邑は、長安の都。疇昔は、過日。昔。◯**揺落**　落葉が揺れながら落ちること。ここでは、漢の武帝「秋風の辞」の「草木黄落して　雁　南に帰る」とあるのを踏まえる。黄落は、木の葉が黄ばんで落ちること。また『楚辞』九弁に「悲しいかな、秋の気たるや。蕭瑟として、草木揺落して変衰す」とある。蕭瑟は、秋風の寂しく吹くさま。変衰は、変化し衰えること。◯**秋声**　秋の物音。風の音や、木の葉の落ちる音。北斉の顔之推「陽納言の鳴蟬を聴く篇に和す」詩（『古詩紀』巻一百二十）に「歴乱として秋声起こり、参差として人慮を撹す」とある。陽納言は、納言中大夫の陽休之（五〇九～五八二）。歴乱は、物の乱れるさま。参差は、ばらばらに散らばるさま。◯**不可聞**　物寂しくて、聞くに堪えない。北周の庾信「趙王の峡中の軍を送るに和す」詩（『古詩紀』巻一百二十五）に「客は行く　明月峡、猿声　聞く可からず」とある。明月峡は、四川省広元市朝天区に位置する峡谷。